

山野草の花が咲く山里を守って = 中土佐町大野見 =

清流通信読者の皆様こんにちは。

今回は、四万十川の源流・上流域、中土佐町大野見から、山野草を守り保護する活動を続ける、青木孝夫さんをご紹介します。



シモバシラの氷の花

青木さんが撮影した山野草写真は毎月展示されている

氷の花 “シモバシラ”

冬の寒い朝、踏み固められていない土の上に見つける『霜柱』。地上温度が氷点下になり地表水分が凍った後、まだ 0℃以上の地中の水分が毛管現象によって地表に吸い上げられ、それが柱状に凍結し地面を持ち上げる。子供の頃、サクサクこれを踏みつけながら登校したことを思い出す。

その『シモバシラ』と名付けられた植物がある。初冬、はじめての寒波が到来したその朝に、美しい氷の花を咲かせるその名も『シモバシラ』。しかし、秋 9～10 月に咲く“本物”のその花は、意外と地味な風情で、どこにでもある野の花といったところだ。ところが、本物の花が終わってからもう一度咲くその“花”は、何とも華やかで美しい氷の彫刻なのだ。(写真: 上中)

氷の花を咲かせるこの『シモバシラ』は、関東以西に分布するシソ科の多年草で、低山の森林内に生え、特に溪流周辺に群生をつくることもあるという。しかし、限られた場所でしか見ることができず、“氷の花”を実際見た人は多くはないようだ。

それもそのはず、この“氷の花”、自然の条件が揃わないと見事な“花”は見られないのだとか。その条件とは、冬のはじめ、最初に訪れる寒波で気温が急激に下がり氷点下になった早朝で、風がないか弱く、雨や雪も降っていないこと、そんな諸条件が満たされた時に、初めて美しい“花”が見られるのだという。この“花”は、枯れた茎の維管束中の水が凍り、茎の外へと伸び出したものなのだが、一度この“花”が咲いてしまうと茎の構造は壊れてしまう。それ故、大輪の花を咲かせられるのは、一年にたった一度だけ、しかも、つかの間の美しさなのだ。何ともロマンティックで幻想的な植物だ。

今回は、ここに載せた“氷の花”の写真を撮影したその人、中土佐町大野見地区にお住まいの青木孝夫さんを訪ね、大野見地区に自生する山野草の話伺った。

中土佐町大野見地区、下ル川(くだるかわ)

四万十川の源流・上流域、中土佐町大野見地区。地区を二分するように、中央を四万十川が貫く。

面積の 9 割以上占める山林が民家の背後にまで迫り、その山々と川との間の耕作可能な場所には、余すところなく棚田や段畑が築かれていて、今なお長閑な山村景観が広がっている。

大野見地区は、四万十川の上流域に開けた盆地上にあり、四方を標高500m以上の山々が取り囲む。ここ大野見の山には、かつては豊かな天然林が広がっていたのだが、昭和30～40年代で「全山植林」を合言葉に植栽が行われ、人口林率は70%以上になって、近年は良質のヒノキを生産する地域となっている。下ル川(くだるかわ)地区は、その大野見の北部に位置し、藩政時代は御留山として、近代は国有林事業が盛んに行われ、良材を産出してきた地域のその中心だ。

ここ大野見下ル川で生まれ育った青木孝夫さん。当時の下ル川は天然木が茂る森が多く、その山の中で自然と戯れながら豊かな子供時代を過ごしたのだという。その青木さんは 10 年ほど前、長く勤めた地元役場を定年退職し、山が好きだった父親の後を引き継いで、本格的に山の手入れをすることとなる。

こうして日々山に入るようになって暫く経った時、青木さんは、人知れぬ山の中で四季折々に可愛い花をつける草花に気が付く。「何という花なんだろうと思ったのですが、自分は当時“山野草”の知識は全くなくて、花の名前などあまり知らなかった。そこで花の名前を本などで調べるようになったのです。それが山野草との出会いでした。」

やがて青木さんは、山の仕事の合間に会う、それら草花の名前を調べ記録し、写真に納めるようになっていく。

「そうするうちわかってきたことは、ここ大野見には、自分たちが気付いてもない野生の草花が、なんと多いかということでした。」

それはいつからそこにあったのかわからないが、一度として忘れることなく毎年のように、同じ場所で、同じ時期に、可憐な花を見せてくれる。来年も同じように咲いてほしいから、柵で囲って立ち入りを制限する。少しでも増えていくよう願って環境を整えていく。

調べれば調べるほどに、世話をすればするほどに、青木さんはそれら草花に、今まで気付かなかった野辺の花たちに心惹かれるようになって、そのけなげな姿に愛おしさを感じはじめたのだという。

山野草が生育する山里を守る

近年ブームになっているこの『山野草』とは、平地や高山など野外に自生する鑑賞価値ある草木、低木及び小低木の一部と、かなり幅広い意味を持つらしいが、日本国内における近代的な山野草栽培の歴史は 100 年程度と浅いこともあり、はっきりとした定義はなされていないようだ。しかし 1970 年代頃からのエコロジーブームなどで、高山植物や野生植物を観賞対象とし栽培するようになり、その後エビネや野生ランブームなどがあり、今はすっかり『山野草』という言葉も定着してきている。

しかし昨今の『山野草ブーム』のその陰で、野生植物を無断で採取する“盗掘”も後を絶たない。日本では、自然保護に対する国民意識の低さもまだまだあるようで、身近な野山からそれらを盗掘して栽培することが横行していることも、残念ながらあるのだ。

「山野草というものは、その場所にあるから美しいということがあります。他の場所に持っていても輝かないし、そこでないと生きられないというギリギリのところまで生活している花も実際多いのです。そういう意味でも、その生活環境自体を守ることが、山野草を保護する上では大変重要なことだと思うのです。」

“地域の宝”を守り育てること

やがて青木さんは、山野草に導かれるようにして、今まで気付いていなかった大野見地域のことにまで思い至ることとなる。

「大野見地区で今までずっと暮らしてきましたね、ここはご覧のようにたいした産業もない、典型的な山あいの集落です。今までは『高齢化が進むだけの何も無い地域だ』と、そういうように私は思っていたのですが、山野草を調べていくうち、これら草花は、地域の“宝物”“資源”ではないかと考えるようになってきたのです。」

『その思いを地域の人と共有したい』そう思った青木さんは、『まずは地域の人に山野草への理解を深めてもらう必要がある』と考え、地域集会所に自らが撮影した大野見の山野草写真を展示することにした。また、四季折々の山野草観察会『野の花見学会』も多い時は月に1~2回開催する。そして、専門家を招いての山野草講演会も企画し、「昨年は、山野草の専門家の方に来てもらってお話いただき、地域の草花を評価してもらったのですが、他所の人が評価してくれることで、地元の価値に自らが気付くということも多いと思います。自分たちはこの場所にいつもいて見慣れてしまっているから、新しい発見ができにくいのだと思います。」

青木さんはまた、山野草の増殖にも力を入れている。「地域に草花・山野草がポツポツとあるという“点”で見える状態ではなく、かつてはそうあったように、“面”で見えるような野草の群生をつくることを夢見ています。そして、山村の文化的、科学的なものをもっと研究し高めていって、山野草が未だ残るこの山里のその付加価値をもっともっと高めれば、そこには山野草を愛する人々が訪れるようにもなると思うし、そうあってほしい。そういうようにこの地域をしていきたいのです。」

最後に、青木さんが、目を輝かせながら話してくれたことがある。

「最近うれしいことがありまして、絶滅危惧種に指定されている 2 つの種がここで見つかったのです。もう見つからないと思ってあきらめていたのですが、ついに探し当てました。それも、一つは大事に保護して増殖に成功したこと、もう一つは、近所の人々の協力で見つかり、今増殖を試みています。」

かつてはこの地域には多かったという 2 つのレッドリストに載る植物、『スズムシソウ』と『サルメンエビネ』。

いつの間にか、その生活の場を追われ、盗掘され、そして姿を消してしまおうとしていた、この二つの山野草。

「彼らの姿には、何か訴えかけるものがある」と言う青木さん。彼らが訴えかけているものは何なのか、その声に耳を傾ける青木さんが撮影した、『スズムシソウ』『サルメンエビネ』のその写真には、確かに私たちの心に届く何かがあるように思われるのだ。

(取材/記事: 矢野由美子)

